



〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナショナリズムと公共性

小島英一 ◆新曜社 ◆6300円

二十一世紀を迎えた今日、ナショナリズムを称揚し国家のためには私心を捨てて尽くすことがモラルとして讃えられ、戦後民主主義と個の尊厳、尊重は人間の墮落を招いただけだった——

極論すれば、そんな論調が幅をきかせている。しかし、戦後五十年の文脈のなかで、おりおりで使用され、意味付けされてきた〈民主〉や〈愛国〉という言葉の論調が単なる「勘違い」であることが判明する。すなわち、著者は戦後社会のさまざまな局面に、保守と革新、民族主義と個人主義といった対立する両者が、ナショナリズムや公共心といった言説をときに応じて互いに無原則に使用しあい、ないまぜになりながら対立構図を作ってきた歴史を検証する。そして、現在の論壇において用いられるそうした言説も、未来に向けた可能性を閉ざし、袋小路に陥っている事実が浮かび上がってくる。戦後社会は、〈民主〉をどのように扱ってきたのか。〈愛国〉をどのように利用してきたのか。戦後史の見直しという手垢のついた物言いを激しく掃きぶる重い問いかけである。